

修士論文(要旨)
2012年1月

「日本事情」教育のあり方に関する一考察
－ベトナムの大学の場合－

指導 佐々木倫子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
210J3009
Du Thoai Tu

— 目次 —

第1章 研究概要	1
1.1 研究背景.....	1
1.2 研究目的.....	2
第2章 先行研究	3
2.1 日本事情教育の概要に関する先行研究	3
2.2 日本事情の授業目的に関する先行研究.....	3
2.3 日本事情の授業内容に関する先行研究.....	4
2.4 日本事情の授業形態に関する先行研究.....	5
2.5 日本事情の授業改善に関する先行研究	6
2.6 まとめ及び本研究の位置づけ	7
第3章 調査1「現状調査」	8
3.1 調査概要	8
3.2 調査結果及び考察	10
3.3 授業の改善すべき点、今後の日本事情の授業に対するニーズ	19
(学習者の自由記述の意見を通して)	
3.4 本章のまとめ	23
第4章 V大学の今後の日本事情の教育の在り方	24
4.1 日本事情の授業目標	24
4.2 日本事情の授業法	27
4.4 日本事情の授業内容	31
4.5 日本事情の授業評価.....	31
4.6 本章のまとめ	32
第5章 調査2「試行授業」	33
5.1 調査概要	33
5.2 試行授業の概要	35
5.3 本章のまとめ.....	43
第6章 調査2の結果及び考察	44
6.1 実施後の稿者自身の気付き.....	44
6.2. アンケート調査の結果	45
6.3. フォローアップインタビュー調査の結果.....	53
6.4 総合的考察.....	61
第7章 まとめ及び今後の課題	65
7.1 まとめ	65
7.2 今後の課題	66

【要旨】

言語学習活動では、その言語が使用される背景、その社会のいわゆる「事情、文化」を知ることは欠かせないと思われるが、日本語学習活動も例外ではない。日本語に限らず、日本事情を扱うことも日本語教育の重要な役割だと思われる。一方、いわば「日本事情」があふれる中で学んでいる国内の学習者と違って、海外の日本語学習者は日本人、日本文化に接するチャンスが限られるため、日本事情教育における教授法や教材開発に一層工夫を加え、学習者の興味を引き付けることが重要だと思われる。

先行研究では、日本国内の学習者を対象とする日本事情教育の目的、内容、教授法等について論じられているものが多い。しかし現在、日本語教育の普及につれ、日本事情教育が海外の日本語学習者を対象に行われるようになってきているという背景のもと、本研究は、海外の日本語学習者を対象とする日本事情教育のあり方を追究する必要があるという問題意識から出発している。

本研究は、ベトナム V 大学日本語学部という海外における具体的な日本事情教育現場に焦点を絞り、V 大学の日本事情教育の現状を調べ、学習者が望む日本事情教育を明確化し、学習者が積極的かつ能動的に参加できるような日本事情教育のあり方を探ることを目的とするものである。このような目的を実現するために、ベトナム V 大学の日本語学習者を対象に、アンケートの調査 1「現状調査」、及びアンケート・インタビュー併用の調査 2「試行授業」の 2 つの調査を行い、研究を進めた。

調査 1「現状調査」では、V 大学の在学生及び卒業生の合計 121 名に対し、日本事情教育の現状、及び授業の目的、内容、授業法、教材などの日本事情教育への学習者のニーズを調べた。調査 1 の結果には、教師から一方的に知識を受ける「講義型」授業ではなく、積極的に授業に参加することによって知識が得られる授業の方を好む、というベトナム人日本語学習者の変容が明らかになった。

調査 1 の結果をもとに、V 大学日本事情の授業のあり方を検討し、適切な日本事情の授業法について理論的に考察を行った。その結果として、「学習者参加型授業」「視聴覚メディアの使用」「比較文化」という 3 つの授業法を提言した。この授業法を実際に日本語教育の現場に応用することによって、積極的に授業に参加する環境が整い、授業への興味が引き出せ、授業の効果を高めることができるのではないかと想定した。その理論と実践の適合度、及び問題点を探るために、調査 2「試行授業」を行った。

調査 2「試行授業」では、提言した授業法をもとに、具体的な学習項目を一つ取り上げ、授業案のデザインを試みた後、実際に V 大学在学生 18 名に対し、授業を試行した。授業後のアンケート調査及びフォローアップインタビュー調査の結果、「学習者参加型授業」「視聴覚メディアの多用」「比較文化」3 つの授業法を併用することによって、学習者の参加度の向上、理解度の向上、学習意欲の向上という教育効果をもたらすことが明らかになった。その一方、教室活動の目的の指示が不足した点、教室活動の時間配分の不適切な点などのような問題点が見えてきた。

本研究の遂げた成果は、海外における日本事情教育現場の一つであるベトナム人日本語学習者のニーズが明らかになったこと、その日本語学習者のニーズに応えられるような日本事情の授業法及び授業像が形作られたこと、の 2 点だと言えよう。

今後さらに、ベトナム全体の日本事情教育の現状を把握し、提言した授業法の効果を明らかにするには、他の教育機関で異なる学習者を対象に、同様の調査を実施する必要がある。この点を検証し明らかにしていくことを今後の課題としたい。

<参考文献>

- 阿部和厚他(1998)「大学における学生参加型授業の開発」『高等教育ジャーナル』第4号、pp.45-65
- 奥田純子(2007)「CCT/IT(異文化トレーニング)」『日本語教授法ワークショップ 増補版』凡人社
- 奥田久子(1988)「学生中心の『日本事情』—基本的な着眼点の授業研究—」『日本語教育』第65号、pp.51-63
- 久米昭元(2000)「異文化コミュニケーション教育用ビデオの開発とその効果—文化対照法を中心に—」『異文化コミュニケーション研究』第12号、pp.113-130
- 桑本裕二・宮本律子(2006)「背景知識の教授をめざした『日本事情』への映像使用」『秋田大学教養基礎教育研究年報』、pp.61-68
- 佐々木倫子(1988)「大学正規科目としての日本事情教育」『日本語教育 65号 -特集日本事情のとらえ方-』日本語教育学会
- 佐藤慎司・熊谷由理(2011)『社会参加をめざす日本語教育—社会に関わる、つながる、働きかける』ひつじ書房
- 佐藤勢紀子(1999)「『日本事情』を開く：授業改善のプロセス」、『広島大学留学生教育』第3号、pp.65-76
- 辻義人(2008)「視聴覚メディアを用いた教育活動の展望 —教材の運営・管理と著作権—」『小樽商科大学人文研究』第115号、pp.175-194
- 長尾洋子(2008)「参加型授業と多層的双方向性—「旅と観光文化」の授業実践から—」『和光大学総合文化研究所紀要』、pp.158-176
- 長谷川恒雄・佐々木倫子・砂川祐一・細川英雄(1998)『諸外国における「日本事情」教育のあり方についての基礎的調査研究』(1995年度～1997年度文部科学研究補助金研究成果報告書)
- 細川英雄(2003)「総合の考え方—問題発見解決学習としての総合活動型日本語教育」『総合の考え方と方法』早稲田大学日本語研究教育センター
- 三浦香苗(2003)「教養教育『日本事情：多文化交流ディスカッション』授業研究」『金沢大学留学生センター紀要』第6号、pp.31-47
- 水内宏・李潤華(2006)「『日本事情』教育における新視点と教材開発」『千葉大学教育学部研究紀要』第54巻、pp.55-62
- 脇田里子(1995)「日本事情のリレー式講義について -平成7年度前期の授業より-」『福井大学教育実践研究』第20号、pp.297-306
- Truong, Thi Mai .(2008). "Tinh hình giảng dạy môn Đất nước Văn hóa Nhật Bản, " Tap chi Khoa hoc Ngoai Ngu,